

「澁澤写真」撮影地再訪に関する覚え書き

八久保 厚志

HACHIKUBO Koshi

(COE 共同研究員)

I はじめに

神奈川大学 21 世紀 COE プログラムにおける筆者等の主要な課題である「澁澤写真」の追跡調査の概要と調査にあたって、その経験や諸課題を覚え書きスタイルで記録することが本稿の目的である。調査の開始から約 3 年を経て、筆者等はその調査結果を示してきた（八久保・須山 2003, 浜田 2004, 浜田・八久保 2005）。そこでは、澁澤敬三が残した写真、フィルム等映像資料の概要と、いくつかの地域の実態調査（追跡調査）結果をまとめている。これらの調査によっていくらかの写真の撮影地の現況などが特定、追録できた。一方、多くの部分が撮影後の加年によって現在では同定できなくなっている。「澁澤写真」は近年の新たな整理によって、従前考えられてきた以上に残されている量が多いことが明らかになっている。これまでの整理の進捗状況が今後も同程度に推移する場合、その整理には膨大な時間的資源が必要となる。早急にその整理体系を整備する必要があるだろう。このような認識のもと、「澁澤写真」を蔵する日本常民文化研究所と共同作業を進展させることが望まれている。以下、私共のグループの調査記録とともにそこで得られた知見を記すことにする。

II 訪問地と行程

私共のグループは、八久保の他、浜田弘明（COE 教員：桜美林大学助教授）、須山聡（2003 年度共同研究員：駒澤大学教授）、藤永豪（PD 研究員：現佐賀大講師）、平井誠（神奈川大学人間科学部助教授）を中心に、主に人文地理学を専攻とする研究者で構成されている。したがって、本 COE プログラムにおける研究遂行にあたっては現地調査を主とする手法が取られてきた。調査にあたって最初の作業は「澁澤写真」のリストアップのための地域区分を行うことであった。しかし、諸般の事情で地域区分は当面写真の所蔵形態上の区分で行うことになった。このことがその後の写真の同定上のいくつかの課題を認識することになった。ともかく、一次資料の情報に規定された形で、大きく①日本の島嶼地域、②日本の臨海部、③韓国の旧跡、④韓国の多島海地方、⑤ウルサンを中心とした韓国の東南部地方、⑥その他（北海道、東北地方他）を調査対象地とした。ただし、すべての地域に澁澤写真が残されているのではなく、研究上の比較や同定のための景観記録のために訪れた地も含まれている。この点を初めに述べておきたい。以下、いくつかの列を述べていくが、東北地方と奄美地方の喜界が島については、次の藤永論文で触れ、③の一部と④および⑤については浜田論文、①の奄美本島については須山論文に詳述されているのでここでは重複しない程度に記すことにする（浜田論文、

須山論文については本稿末の参考文献覧参照).

Ⅲ 日本の島嶼地域

日本の島嶼地域では、新島（東京都）、佐渡島（新潟県）、奄美大島（鹿児島県）、小豆島（香川県）、隠岐島：島後（島根県）、石垣島（沖縄県）を訪れた。このうち、奄美大島は須山論文（八久保・須山 2003）、隠岐島については拙稿（浜田・八久保 2005）に記述しているのでそちらを参照願いたい。ここでは、佐渡島、新島、小豆島、石垣島の調査について述べる。



写真1



写真2

佐渡島へはCOEプログラムが本格的に動きだす前から、予備的な調査として2002～4年間に3度訪れた。その目的は、佐渡島の海岸部の景観調査と、国中平野の土地利用および産業調査、新潟港の整備状況調査と現況景観の記録であった。ちょうど北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国、以下北朝鮮と略す）との関係悪化が同時期に進み、北朝鮮の貨客船の入出港時に当たったときもあり、幾分緊張した雰囲気と同地域に蔓延している時期もあった。その中で、当初の調査を行うことができたのは同島出身のゼミ生のおかげでもある。彼の地の情報を詳しく伝えてもらい、調査時期を調整し、多少落ち着いた時を選ぶことができたからである。

本題とは多少離れるが、私どもの現地調査はこのような時節柄、日本海岸と韓国で行うにあたって、調査地の情勢分析を行わねばならなかった。ソウルや釜山など大都市ではあまり感じなかったが、多島海沿岸や地方での調査は、詳細な大縮尺の地図、統治下の写真を持参していた私たちに幾ばくかの緊張感を覚えさせずにはいなかった。調査は、須山先生、浜田先生、その他現地スタッフと同行しての調査であったが、調査にあたっての責任的な役割はおそらく私にあったので、現地での交渉ごとなど完全に現地スタッフに任せねばならないことも多く、真意が伝わっているのか否か心細いことが幾度かあった。この点、これまでの海外調査（中国やイギリス、韓国など乏しいものであるが）にな



写真3



写真4



写真5



写真6

い緊張感を感じていたのである。この点も記録しておきたい。ともあれ、佐渡島、新潟では有意義な調査ができた。

新島を訪れたのは2003年も押し詰まった12月29日のことであった。東京調布飛行場から12人乗りの小型機に搭乗し、折からの強風の中、午前11時に飛び立った。小型機はともかく調布飛行場を使ったのは初めてであり、機下に広がる武蔵野丘陵の土地開発の景観は壮観であった。我を忘れてカメラのシャッターをきった。この点小型機は眺望がどの席からもきき、まことに有益である。当初調査日はこれより1週間前に予定していたが、強い季節風の影響で数日間船も飛行機も欠航していた。待ったかいがあったといえる。無事到着、宿泊施設にチェックイン後、中心集落をさまよった。新島の「澁澤写真」は現在の中心集落ではなく、島の北端の漁業集落ばかりであったので、ここでは、現況景観を記録することにした。その途中、郷土博物館を見学し、館長先生より新島の歴史や景観形成上の逸話を記録することができた。また、常民研の展示にご協力願ったことについてもお礼を述べ、席を辞した。翌日、島の北端の集落へ車で向かい、澁澤写真の撮影地と思える地点を探查できたが、景観変化が激しく同定までたどり着くことができなかった。地元の方への聞き取りでも、芳しい回答を得ることはできなかった。ただ、北端の山塊の形や周辺の樹相はそれらしいものであった。ここでは、郷土博物館の情報と現地での聞き取り、現況景観の記録、とくに小型機からの写真が得られたことは幸運であった。また、新島空港では、個人所有の小型機の発着が多く、チャーター便も定期化しており、機上からの景観撮影が簡便に行える可能性を認識できた(写真1-8)。実は、隠岐島へも伊丹空港から空路訪れた。2005年の春のことである。その時は澁澤写真の同定調査ではなく、日本の



写真7



写真8



写真9



写真10

島嶼部の景観変化に対する空間編成上の課題析出のために訪れたのである。詳しくは拙稿（浜田・八久保 2005）を参照願いたい。

小豆島の調査は、2006年3月に平井先生と共同で行った。小豆島は瀬戸内式気候区の典型地域で、小島ながら、冬と夏の乾期によってオリーブや柑橘類の生産、大豆、小麦などの産出もある。特にオリーブは日本の発祥の地であり、島内各地でオリーブの畑が見ることができる。また、オリーブに関する各種事業所、資料館、観光施設、特産品が見られる。また、冬の寒気は醸造業の立地と、素麺業の立地を規定してきた。特に醤油はこの地方独自の風味が特徴的で、島外出荷も多い。また、柑橘類とブレンドした各種ドレッシングも独自の地場産品となっている。素麺も播州揖保の糸、大和の三輪、長崎島原の素麺とともに著名な産地となっている。同時に、瀬戸内海をバックに純日本の海岸部の集落景観が残存し、かつて、壺井栄の著した岬の分教場を舞台とした「二十四の瞳」の映画（木下啓介監督）を懐かしく思い出すにふさわしい。筆者は、おそらく同時代的にその映画は見えていないはずだが、見たような錯覚を覚えるような景観なのである（写真9－14）。

石垣島での調査は、COEの直接予算で行ったものではないが、日本の海岸部や韓国の多島海の写真を比較分析するための現況景観調査を主たる目的で行った。2006年9月に私のゼミ生10人とともに、石垣島全体の現況景観の撮影を、観光業を中心とした産業調査の合間を見て行い、澁澤写真以外の収集した戦前の景観写真との異同を現地で議論したのである（写真15－18）。沖縄本島と与那国島における景観形成とその変化については、拙稿（浜田・八久保 2005）で述べているが、石垣島、特に石垣市街地は現在多くの開発プロジェクトが進展しつつあり、景観変化が激しい。石垣港を拠点とした西表島、



写真 11



写真 12



写真 13



写真 14



写真 15



写真 16



写真 17



写真 18

竹富島などへの観光ルートの開発により、新港建設が進められているほか、新設なった市立図書館やホテルなど、特に港地区の変化が激しい。

IV 日本の臨海部

日本の臨海部については、常民研の代表的な労作「豆州漁業史」を「澁澤写真」で後付けすることが筆者の希望であった。職場に近いこともあり、2004、2005年中に4～5度沼津から戸田、三島から静浦をとって西伊豆地域を自家用車で走り回った。文献でイメージした伊豆半島西海岸の景観とはおそらく隔世の感がある。浦々の漁港は整備され、埠頭と倉庫、燃料用タンク、魚市場・漁協の建物、民宿、水産加工の作業場、網干し場などといった、旧来この地を代表した要素から、リゾートホテル、民宿、資料館、土産店、大型のレジャー施設、レストラン、ダイブショップなどの観光の要素がその中心となっている。おそらく、日本の漁業集落の景観変化をみるには欠くことのできない要素がそこに展開していた。各岬から垣間見える駿河湾と富士の峰の景観は、全体かつ広角画面として変わることはないのだろうが、仔細に注目すると湾頭の富士市方面では製紙工場や化学工場の煙突が白煙をたなびかせているし、富士山そのものも世界自然遺跡に認定できないほど廃棄物で覆われているという。そのほとんどがヒトの多様な欲求の所産であることを思うと、「豆州漁業史」も「澁澤写真」もその記録資料としては一級であり、先人の先見性に敬服の念が強い。ただ、持参した「澁澤写真」としては景観写真が少なく、十分な調査ができず、今思うと残念である。

四国の新居浜は周知のように別子銅山から搬出された銅鉱石やインゴット、その他含有鉱物が積み出された港町であった。同時に住友の財を築く端緒となった地である。ここにも折を見て数度訪ねた。銅山跡地は巨大な資料館として再構築されており、子供達ばかりでなく多くの観光客を集めている。そこでは旧の景観は残されている。かつて筆者はCOEのニューズレターにイングランドの鉱山跡地の景観について記したが、まさに日本において比較できる景観を有する地である。イングランドの鉱山博物館を訪問したのは直接的には近郊のバーミンガムで行われたIGU（国際地理学連合）の産業空間コミッションでの発表時のことであるが、翌日の発表を控えそのことで頭がいっぱいな時期だっただけに新居浜（別子銅山）との比較が多少ともリラックスさせることになった。この点、地理学における景観研究がいくらかの一般性を持つものであるとの確証を個人的には得たような気がしたものである。本COEで苦闘してきた体系化や手法上のアイデアのいくつかのイメージ形成にとってこの経験は、エポックとなった。ただこの経験が今後いかに研究成果に反映できるかできるか、いささか自信がない。

本稿のおわりにあたって、付言しておけば、この数年間、「澁澤写真」の調査と分析、景観変化に関する諸課題を指摘し、体系化のための考慮することについて多くの感慨を得た。今後これらについては示して行くことになるが、当面、「澁澤写真」の分類上の試論について本年度の年報に若干触れる予定である。参考願えれば幸甚である。

参考文献

- 八久保厚志・須山聡（2003）「澁澤フィルムの図像解析とその応用」
COE年報No.1 105～125.
- 浜田弘明（2004）「『澁澤フィルム』の景観分析とその課題」
COE年報No.2 74～93.
- 浜田弘明・八久保 厚志（2005）「写真資料と景観変容－澁澤フィルムの分析にむけて」
COEプログラム調査研究資料1 127～159.